

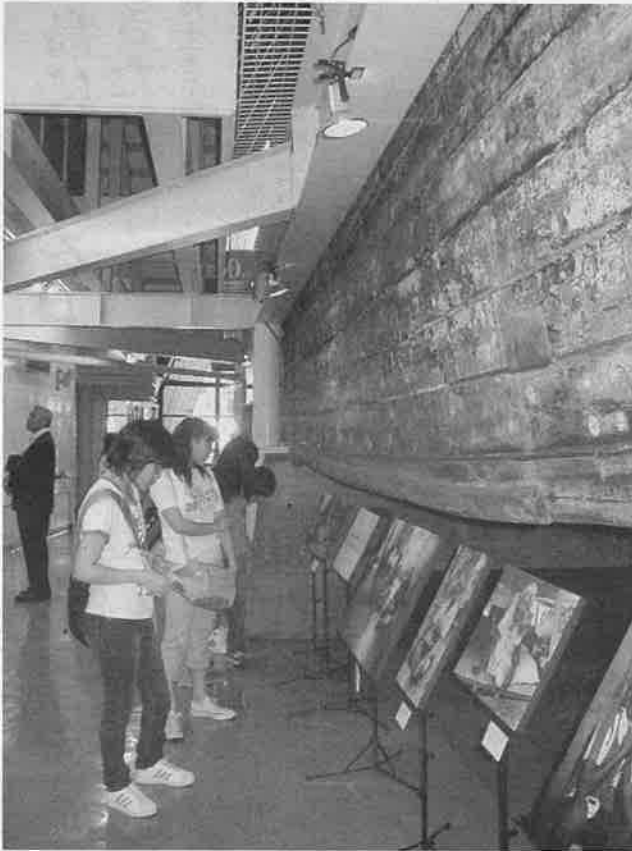
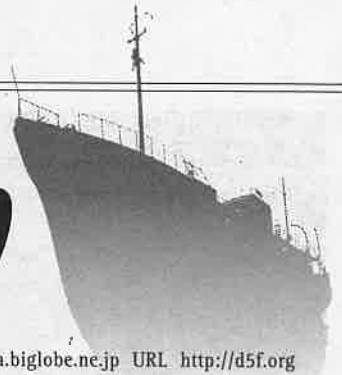
都立 第五福竜丸展示館ニュース

2004.06.01
No.309

福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



被災50周年記念特別展開催中

5月の風、新緑の展示館に 児童・生徒など多数来館

五月の連休、前半は好天にめぐまれ、夢の島公園にたくさんの方々が来園されました。第五福竜丸展示館にもこの季節は各地の修学旅行生をはじめ、都内の小学生など八〇校をこえる見学があり、また海外からも農業研修のアジア太平洋地域の留学生の見学、青年や高齢者のグループなど多数来館し、ボランティアの会のメンバーも一日数回づつのガイドをおこなっています。熱帯植物館でもイベントがあり、バーベキュー広場も連日賑わいました。

少年のための総合的なスポーツ・文化施設としてスタートしたものです。

公園内には三月三十一日に東京スポーツ文化館がオープンしました。これは、温水プール、室内競技場を持つ総合体育館をリニューアルし、さらに宿泊・研修施設を加えて青

展示館では、五月一日に、被災五〇周年記念の三番目の特別展企画として、フォト・ジャーナリスト島田興生さんの写真展「曝された樂園、いのち、子どもの未来」がスタートしました。四五点の写真パネルが船体をぐるりと取り囲んで展示され、島の老人、若者、障害に苦しむ子どもたちなどの表情が迫ります。写真展を記念して写真パンフレットが製作発行されました。

会期は六月二七日まで、たくさんの方にお声を掛けていただきご来館・ご鑑賞、また写真パンフの普及にご協力くださるようご案内いたします。

50周年記念事業へのご寄付、ありがとうございました。

財団法人第五福竜丸平和協会

写真展オープニング

汚染のない島に住めるよう
見守っていききたい

島田興生さん語る

出会い

今からちょうど三〇年前の一九七四年七月に前田哲男さん（現東京国際大学教授）と一緒にロンゲラップ島に行きました。その契機はビキニ水爆実験が行われたビキニ環礁だったんですが、ビキニがどうなっているかは、第五福竜丸が被曝した一九五四年三月に日本の新聞・ニュースで若干伝えられた程度で現地の情報はありませんでした。

知らないことを知りたいと



味で「出会い」だったと思うわけですね。

島捨てに立ち会う

三〇年間関わり続けていく上で決定的なものは、一九八五年の「島捨て」といわれるロンゲラップの脱出劇です。ロンゲラップの人がロンゲラップ島から自分たちの力で脱出するということは、およそ予想し得ない状態でした。

三二五人が自分たちの家を解体し老人から赤ちゃんまで全員が島を捨てるという行動を取ったのです。そのインパクトというのはものすごいものがありました。

ロンゲラップの人が三〇年間、体に取り込んできた放射能というものの凄まじさを、自分たちの体中だけで閉じ込めておくのではなく、世界的にアピールするために選んだ行動だろうと思うわけです。

我々が仕事を続けられたなかで特に大事だったことはマーシャル語を日本語にしてくれる通訳さんがいたということなんです。四週間ほとんどつきつきりで通訳してくれました。島の人たちの心の深いところはわかりにくいのですが、最初の段階で、島の人たちとの間で伝え合う人があらわれたということは、ある意

ヨンを撮ったわけです。

ブンブンプロジェクト

太平洋の人たちは昔からカヌーを家宝としてきました。船がなければ暮らしていけない、生きていけないわけです。ところがロンゲラップからメジャトに移住した三〇〇人が持っていた船といえば、五、六メートルしかない小さな船で、一二〇キロの外洋をイバイ島まで走らなければなりません。

日本に戻ってきた一九九四年から命の綱である船を贈ろうということで「ブンブンプロジェクト」を始めました。ロンゲラップ元村長ネルソン・アンジャインさんは「俺たちは船がほしい」ということを、以前から言っていました。「船があればどこへでもいけるし、被曝者との交流もとれるし、病人も運べます」と。

第五福竜丸の航海

マーシャルの人が被曝したことを、もし福竜丸が現場にいなければたぶん日本人は誰も知らなかっただろう、この船が死の灰をあびて焼津に帰

港したことで、マーシャル人が被曝したことを世界の人々が知るきっかけになったんですね。そういう意味ではすごいメッセージを伝えてくれたわけです。

第五福竜丸はマーシャルと日本を結ぶメッセージの船でなくてはならないと前田さんと三〇年前に話し合った記憶があります。

実は、陸にあがっていても第五福竜丸はその後ずっとマーシャルと日本を結ぶ航海をしていたんだと思います。いろいろな人がこの船を見ることで、もつと太平洋の島々の人とか現在の核拡散によるアジアの核状況に思いをめぐらす大事なゲート（入口）の役割を担っているだろうと思います。

マーシャルの核実験場、被曝島民はロンゲラップだけではありませんし、マーシャル諸島共和国はこれからますます厳しい状況があるんですけど、そういうことをみつめていくためにも、第五福竜丸は大切な船だと思っています。（フォト・ジャーナリスト）

先人の偉業..ビキニの降下 灰中の放射能測定に思う

山本 政 儀

一九五四年三月一日、マグロ延縄漁船・第五福竜丸がマシヤル諸島のビキニ環礁で米国が行った核実験(高性能火薬一五メガトンの爆発量に相当、三F爆弾)に遭遇し、乗組員二三名が被災した不幸な事件が発生した。この事件から五〇年になる。

らにウラン237がβ壊変して生成する半減期の長い娘核種ネプツニウム237(α壊変、半減期=214x106年)の検出を試みたが、微弱すぎた定量は不可能であったと述べられている。

*

当時、日本の科学者達がビキニ降下灰中にウラン237(α壊変)はウラン238(α2n)の核反応で生成、β壊変 半減期675日)を検出したことが図らずも爆弾の正体を解明する糸口になった。ウラン237は半減期が短いので、さ

金沢大学の低レベル放射能実験施設が出来てまもなくの頃被災後二五年を経た一九七九年四月下旬に阪上正信、小村和久先生らが東京・夢の島の第五福竜丸展示館を訪ね「JSG」ゲルマニウム検出器で測定を実施した(詳細はLLRL年次報告書、LLRLAR



ボンデン竹のシュロ

船体のほか、延縄やボンテンチクのシュロ(延縄の浮きの目印)に使用、船体塗料などの測定を行った結果、セシウム137、コバルト60、アンチモン125、ユウロピウム155、アメリカシウム241が比較的容易に検出された。この時に研究用にとほんの少し頂いたと思われるボンテンチクのシュロ試料が、当実験施設に保存されていた。

*

私は一〇数年前に一度、二〇〇二年一二月には大学院生の坂口綾さんを伴って久しぶりにこの展示館を訪れた。周囲や展示物も少し変わったように思えた。放射能研究を志す者には、一度は訪ね、記憶に留めたい場所である。

当時、検出されたウラン237がどの程度の放射能レベルであったのかに興味を持ち、このシュロ中のウラン237の壊変生成物ネプツニウム237の分析を試みた(一九九五年頃)。

まず、シュロ試料〇・三八グラム(乾燥物をゲルマニウム検出器でγ線測定すると、

セシウム137、コバルト60がはつきりと検出され、死の灰の影響が残留していることを興味深く感じた。次いで、電子顕微鏡—蛍光X線分析を併用して付着成分の元素組成を調べカルシウム、マグネシウム、イオウの存在を確かめた。その後、放射化学分離・精製を行い、ネプツニウム237と共にウラン235、234、238、プルトニウム238、239、240、241同位体及びアメリカシウムをα線スペクトロメトリ等で定量した。極く微量ではあるが、115 mBq/gのネプツニウム237を被災から四〇年後に初めて検出することに成功した。このネプツニウム237放射能量を基に当時のシュロ中のウラン237を評価すると原子数で 1.1×10^{12} 個/g、放射能強度で 1.3×10^6 Bq/g存在していたことが推定できた。

*

当時の科学者達は、ウラン237の減衰を考慮すると、これよりも二桁程度低いレベルの放射能を化学分離させな

からGM管計数装置でウラン237の壊変を徹夜で測定し続けていたと推察出来る。最も興味深いことは、一九五四年三月二六日に木村健二郎先生らが評価したウラン237/プルトニウム239、240放射能比 $(50 \pm 3) \times 10^4$ が、今回の測定から評価した値 (17×10^4) と測定誤差内でよく一致していることである。

改めて、当時の科学者達の分析、測定能力の素晴らしさと努力の結晶を強く認識させられる思いである。

当時のプルトニウムは、化学分離操作を何回も繰り返して原子核乾板上に出来るプルトニウムからのα線の飛跡を顕微鏡で入念に観察して求められている。きめ細かな気の遠くなる仕事である。現在、分析法や測定法の進歩は目覚ましく、放射能測定が比較的簡単にできるようになった。先人の偉業を噛みしめながら、この分野の夢を追いかけていきたいと思います。(金沢大学教授・同大学理学部低レベル放射能実験施設/LLRL)

I N F O R M A T I O N



ゴールデンウィークの青空を、岡本太郎デザインのTARO鯉のぼりが展示館前で泳ぎました

*



島田興生写真展オープニングには駐日マーシャル大使アマットライン・カブアさん、マーシャル諸島友好協会の遠藤和重さんはじめ、ブンブンプロジェクトのメンバーやジャーナリストなど50名が参加し、島田さんによる記念講演が行われました。その後、懇親会が展示館横の庭で催されました。

今回の写真の展示はデザイナー高橋一字さんのアイデアで譜面台を活用し、写真の向こうに船体が見える空間構成となっています。開催日にあわせ平和協会により写真パンフレット(A4 7か-18頁頒価1000円)が発行されました。

ミニ企画展示 サンゴと貝のコレクション



ビキニ島民が移住させられたマーシャル諸島キリ島で、海外青年協力隊員として島の小学校で2年間にわたり教員生活を送った多田智恵子さん(宮城県在住)から、マーシャルの島々で入手した貝殻とサンゴが届きました。マーシャルをテーマにしたコーナーに展示、ロンゲラップの被曝者の写真展と呼応しています。多田さんのキリ島での経験は、著書『きょうもえんまん〜ビキニ環礁を追われた人々と暮らして』(健友館刊・展示館でも販売中)で詳しく紹介されています。

国民平和大行進出発

5月6日、2004年原水爆禁止平和行進(平和行進実委が主催)が、夢の島を出発しました。1958年から続けられ47回目。出発式には約500人が参加。第五福竜丸平和協会から川崎昭一郎会長が挨拶、ビキニ水爆被災50年の年の平和行進団を激励しました。

図録が全国学校 図書館協議会選定に!

ビキニ被災50周年記念出版の図録『写真でたどる第五福竜丸』が日本図書館協会に続いて全国学校図書館協議会(SLA)でも選定図書となりました。

3月の刊行以来全国の公共図書館、学校図書館からの購入申し込みが続いています。ぜひ、地域の公共図書館に購入希望をだしてリクエストくださるようお願いいたします。

また広島・長崎の原爆資料館、立命館大学国際平和ミュージアム、江戸東京博物館、国立歴史民俗博物館のミュージアムショップでも取扱っています。まわりの方にもぜひ勧めてください。



報道などから

- 4月1日読売新聞「kodomoe伝える」面、高校生記者による紹介。
- 5月11日中国新聞文化面 安田和也事務局長の投稿「フクリュウマル 知らない世代に伝えたい」で展示館の日常の取り組み、アート展などで多様に発信する被災50周年記念事業紹介など。
- 島田興生写真展の紹介記事が読売新聞東京版(5月2日)、朝日新聞東京版(5月23日)に掲載されました。
- 5月17日北海道新聞解説面「風 論説委員室から」9月の特別展に向けて進められている「久保山さんへの手紙」の中より、北海道からの手紙を紹介。

平和協会の理事会・ 評議員会ひらかる

財団法人第五福竜丸平和協会は、2004年度最初の評議員会を5月17日に、理事会を5月24日に開きました。

承認事項および議題は、2003年度の事業報告と2003年度の収支計算書についてです。事業については、被災50周年記念プロジェクトを立ち上げ、常設展示のリニューアルと記念出版の図録「写真でたどる第五福竜丸」を編集・発行したこと、2月14日には展示のリニューアルオープニングのセレモニーと特別展をスタートさせたことを中心に、来館者の増加と多数のメディアでの報道などについて報告されました。

財政に関しては、50周年記念の募金が目標額を1年で超えたことにたいし協力者への感謝がのべられるとともに、全体としては、委託費の減少もあり厳しい状況にあること、現況を踏まえた日常運営を行うことが確認されました。また、賛助会員(現在211個人、51団体)への協力を広げることも強調されました。